

2025

7

No. 747

國學院大學学報

「川上の空」
照り白む若葉の山の
晝ふけて、木々をしづむる
松蟬の聲
『水の上』
釈 道空

国学院大学 令和7年7月20日(日) 定期号(毎月20日発行) 1部20円
[発行] 国学院大学 [編集] 総合企画部広報課 〒150-8440 東京都渋谷区東四丁目10-28 [電話] 03(5466)0130 [FAX] 03(5466)0528

祭 儀 月次祭 8月1日(金) 午前10時 神殿



特別な支援が必要なお子さんに対する保育の実践研究

人間開発学部・野澤純子教授

保育の現場で特別な支援が必要な子どもたちに対して、実際に支援にあたるのは保育者たちだ。そこで支援がうまくいかず、保育者たちも困っているときに、とるべき方法を共に考えていくのが、野澤純子・人間開発学部子ども支援学科教授である。

子どもたち自身に変化を求めるのではなく、周囲で支援をおこなう保育者のかわり方が変わっていくこと。そして、研究者としてノウハウを押しつけていくような一方向的なやり方ではなく、あくまで現場でアイデアが生まれていくように双方方向性を重視するなかで変化をもたらしていくということ。インタビュでは、そうした野澤教授の姿勢が強くにじむものとなった。

研究者に聞く

4・5面に続く



祭儀と歴史を背負う神職

神道文化学部・山口祐樹助教

身ひとつで飛び込んだ、神宮の世界。そこには、人生を懸けて、そして悠久の歴史を背負いながら祭儀に奉仕している生粋の神職たちがいた。そう、山口祐樹・神道文化学部助教は熱を込めて語る。

神職として奉職するに至る、大学院までの日々を経て、伊勢の神宮での貴重な経験について話してもらった。そこで聞きし、学んだものがあるからこそ、いま、学生たちに伝えられることがあるはず――現場肌の教員を自任する山口助教は、そう信じながら、未来を担う若人の前に今日も立つ。

夏越の大祓

心身の罪穢れを祓い清める



夏越の大祓が6月30日、渋谷キャンパス神殿で執行された。佐柳正三理事長、針本正行学長はじめ役教職員らが参列し半年間の罪穢れを祓い清めた。

大祓は、毎年6月と12月の年2回、宮中をはじめ全国各地の神社で行われ、日常を過ごすなかで知らず知らずのうちに犯した罪や過ち、心身の穢れを祓い清める神事。大祓詞を奏上し、人形と呼ばれる人の形に切った白紙で体を撫でて罪穢れを移し、和紙と麻とを細かく切った切麻などで心身を祓い清め、無病息災を祈る。

本学では毎年、大祓に際して事前に渋谷・たまプラーザの両キャンパスで人形と切麻を頒布しており、在学生をはじめとした希望者が自宅等でお祓いができる機会を設けている。当日は事前に託された多くの人形が、参列者の人形とともに祓い清められた。

みはるかすもの

蟬の声が本格的に聞こえはじめ、空はすっかり夏の色に変わった。入道雲が立ちのぼり、照り返す日差しに地面が白くかすむ。熱波から身を隠し、うつむきがちに歩いていった人々も、夕暮れの風が頬をなでる頃には、顔を上げて通りを闊歩する。風にそよぐ草の長い影。雲の輪郭を消していく茜色の空。そんなささやかな景色もまた、確かな季節のしるしである▼三十六歌仙の一人である凡河内躬恒は、「夏と秋とゆきかふ空の通ひ路は かたへ涼しき風や吹くらむ」と詠んだ。夕空を渡るひと筋の風に、季節の移ろいを感じ取ったその感受性は、古の人々が自然の移ろいに寄せたまなざしを今

に伝えている▼冷暖房や照明が空間を一定に保ち、気象アプリが気温や湿度を数値で知らせてくれる現代の暮らしでは、風の匂いや空の気配にふと気づく、そんな時間は、ずいぶんと少なくなった。季節の機微は、私たちの感覚の届かないところへ、いつしか遠ざかっているのかもしれない▼そうした感受性を呼び戻す手がかりとして、文学はひとつの扉となる。自然の移ろいや季節のかすかな揺らぎをとらえ、ことばに留めようとする試みは、詩や物語のなかに時代を越えて繰り返されてきた。文学はいつの世も、見過ごされがちな景色に光を当て、私たちの感覚に静かに語りかけてくる▼強い日差しに追われる夏の日こそ、一服の涼を求めて書をひらきたい。そこに吹く風は、忘れかけた感覚をそっと揺り起こしてくれるに違いない。

主な内容 2面／浴衣で彩る「和装DAY」キャンパスで日本文化に触れる 3面／公開講演会「渋谷から始まった！都市と農業をつなぐアグリノベーション」を開催
4・5面／研究者に聞く 6面／渋谷区図書館連携事業「新図書館ワークショップ」を開催 7面／インフォダイジェスト

最終面から K:DNA I面／柔道部 東京都ジュニア体重別選手権大会で6選手が入賞 8人が全日本大会へ出場決定

浴衣で彩る「和装DAY」 キャンパスで日本文化に触れる



日本文化の体験や発信する機会として例年、七夕にちなんで行われている「和装DAY」が、渋谷とたまプラーザの両キャンパスで7月4日に開催された。願いが込められた短冊が取り付けられた笹飾りや、風車、七夕飾りなどで彩られたキャンパスでは、多くの学生が涼しげな浴衣姿で過ごした。

■「和装WEEK」で演舞や演奏など披露
渋谷キャンパスでは、6月30日から7月4日にかけて「和装WEEK」として、昼休みに部会・サークルの演舞や演奏が行われ、青葉雅楽会による雅楽演奏や全学応援団のリーダー公開、落語研究会による七夕寄席などがキャンパスを盛り上げた。音楽研究会Inside Music Orchestraによる七夕ライブでは、演奏者全員が浴衣姿で登場。多くの学生や教職員が足を止めて演奏を楽しみ、ソロパート部分ではひととき大きな拍手や歓声が湧き起こった。

■短冊・七夕飾りに彩られるキャンパス
渋谷キャンパスでは、鮮やかな七夕飾り、学生たちが手作りの色とりどりの風車や提灯などがキャンパス内を彩った。たまプラーザキャンパスでは、1号館エントランス通路の天井に織姫と彦星やその二つの星を隔てる天の川をイメージしたイルミネーションが設置され、キャンパスを照らしていた。両キャンパスで毎年恒例の笹飾りは「健康に過ごせよう」「部活の大会で優勝できよう」などに「部活の大会で優勝できよう」などの、思い思いの願いが込められた短冊で埋め尽くされた。

■浴衣姿で「国大の夏」を演出
4日の「和装DAY」当日には、着付け講習会も催され、大勢の学生たちが浴衣などの和装に身を包みキャンパスを歩き交った。体育連合会が提供する縁日コーナーでは、学生たちが射的やスーパールールすくいなどを楽しんだ。渋谷キャンパスでは、学生イベント企画リーダーによる提灯の絵付け体験やビンゴ大会なども開催。絵付け体験に参加していた1年生は、「今日は授業がない日だったので、和装DAYのために大学に来た。初めての参加なので楽しみたい」と笑顔を見せた。また、藤澤紫・文学部教授による特別講座「遊べる日本美術 特別編 七夕と夏の涼く浴衣・幽霊・夕涼み」も開講され、一般の参加者らが浴衣姿で受講する姿も見られた。一部の教職員も和装で授業や業務を行うなど、キャンパスが普段とは一味違った活気に満ちていた。

国際交流バスハイクで 学生たちが交流



国学院大学学生部が主催する国際交流バスハイクが、6月8日に実施された。この企画は、留学生を含む学生同士の交流を目的として毎年開催されており、今年度は教職員の引率のもと、約40人が参加した。

今回は、東京都から神奈川県にかけての地域をめぐる日帰りバス旅行を行った。亀戸天神社（東京都江東区）では正式参拝を行い、みなとみらい周辺エリア（横浜市西区）では、お題となるものの一部が写された写真を手掛かりに、それは何かを探していくレクリエーション「フォトアドベンチャー」を通じて、参加者同士が親睦を深めた＝写真。

参加した学生は「グループで行動する時間が多かったため、たくさん話す機会があり、みんなと仲良くなれた」と感想を語った。

「WORLD FOOD FAIR 2025 SPRING」が開催



「WORLD FOOD FAIR 2025 SPRING」が、6月23日から7月11日まで、渋谷キャンパス3号館2階のメモリアルレストランで開催された。この催しは、国学院大学に在籍する交換留学生が企画に携わり、母国の味を学生や教職員にも楽しんでもらおうと実施されたもので、期間中は留学生ゆかりの各国料理が週替わりで提供された。

第1弾ではスペイン料理のトルティーヤ・デ・パタタス（スペイン風オムレツ）、第2弾ではベトナム料理のバインミー（ベトナム風サンドイッチ）、第3弾ではイタリア料理のラザーニアが登場した。それぞれの初日には留学生が集まって食事会が開かれ、料理へのこだわりや日本の食文化との違いについて語り合う姿が見られた＝写真。食を通じて国際交流が深まる、温かく活気ある催しとなった。

令和7年度成績優秀者奨学生67人を表彰



国学院大学は、令和7年度成績優秀者奨学生制度の対象者として、67人を選出した。同制度は、前年度に特に優れた学業成績を収めた学生を表彰し、学修意欲のさらなる向上と能力の伸長を目的として実施されている。

表彰式は6月18日に開催され、文学部・経済学部・法学部・神道文化学部の奨学生を対象とした表彰式は渋谷キャンパスで、人間開発学部および観光まちづくり学部の奨学生を対象とした表彰式はたまプラーザキャンパスで行われた。渋谷キャンパスでは、石川則夫副学長（文学部教授）が「今回の受賞を誇りに思っていたんだけど、人は一度頂点に立つと、守りに入りがちだが、それでもなお挑戦し続ける姿勢を持ち続けてほしい」と述べ、学生たちを激励した。たまプラーザキャンパスでは、太田直之副学長（人間開発学部長）が登場し、「今回の受賞は、皆さんの日ごろのたゆまぬ努力と研さんのたまものだ。今後の学修においても引き続き励まされることを願っている」とあいさつした。

両キャンパスともに、各学部長から奨学生一人一人に賞状が授与された＝写真。式の最後には、学生代表が感謝の言葉とともに、今後の学生生活への意気込みを力強く語った。

健康増進を目的に、 地域住民と学生が交流



たまプラー・ウェルネスアカデミー2025開催

たまプラー・ウェルネスアカデミー2025が6月7日と28日にたまプラーザキャンパスで開催された＝写真。この企画は、地域住民の健康増進と運動習慣の定着に役立てるため、人間開発学部の地域ヘルスプロモーションセンターが毎年開催している。

7日の第1回では、同センターの活動に携わる学生と教員が協力し、参加者の筋肉量、骨密度、血管年齢、認知機能などの測定や、体力測定、栄養調査などが行われた。筋肉量測定の一環で行われた片足の起立動作や大股歩行などの動作は、一見簡単そうに見えても、意識しないと日常生活ではあまり使うことがない筋肉を使うため、参加者からは予想外の身体の状態や数値に驚きの声が上がった。

28日の第2回では、第1回で測定したデータが細かなグラフなどに可視化・整理され、参加者一人一人に配布された。その結果を基に同学部の林貢一郎教授と小林唯准教授による測定結果の解説とフィードバックが行われた。参加者らは同年代の平均値と自身の状態を比較した上で、年齢を重ねるごとに生じやすくなる症状やリスクを予防、改善するための情報について、レクチャーを受けた。

その後は、支援学生の会「ちへる」に所属する学生らによって、認知機能や主要な筋肉を刺激する運動が紹介され、参加者と学生らは一緒に体を動かしながら、共に健康づくりへの意識を高めている様子が見られた。

宮廷装束の着装披露を開催



6月21日に渋谷キャンパス120周年記念2号館 祭式教室で、衣紋道研究会主催・国学院大学神道文化学部共催の衣紋披露「宮廷装束の着装披露－夏めく武官の束帯と女房装束－」が開催された。この企画は伝統文化を知識・モノ・技術で継承する衣紋道研究会と神道文化学部により実施され、今回で8回目の開催となった。

当日は衣紋道研究会所蔵の装束を使用して武官の束帯と女房装束（十二単）の着装を披露。御方役は、北島武士さんと、神崎桜子さん（ともに神文4）を務めた＝写真。

王朝装束の実物と、着装の様子を間近で見ることができる貴重な機会とあって、本学学生だけでなく、一般参加者を含め100人以上が参加した。

御方役を務めた北島さんは「衣紋についてさまざまな気づきを得た。丁寧に着付けを前提とした上で、御方に負担をかけないように工夫が凝らされていることが分かり、衣紋道とは人への気遣いや尊重の表れであると改めて感じた」と述べた。

また、神崎さんは「貴重な機会に深く感謝している。装束を着用し、歴史の重みや衣紋者の技に感銘を受けた。今後は日本文化の魅力を世界に発信できるよう努めていきたい」と語った。

コミュニケーション・スキル講座

「ヨガ体験ワークショップ」を開催



6月25日、渋谷キャンパスで、学生相談室主催のコミュニケーション・スキル講座「ヨガ体験ワークショップ」が開催され、本学の学生10人が参加した＝写真。

指圧師・ヨガインストラクターのumeco氏を講師に迎え、梅雨時期のセルフケアとしてのヨガを体験。参加者は、心身を整えるさまざまなポーズや呼吸法を学びながら、リラックスしたひとときを過ごした。

公開講演会

「渋谷から始まった！都市と農業をつなぐアグリノベーション」を開催



令和7年度国学院大学研究開発推進センター公開講演会「渋谷から始まった！都市と農業をつなぐアグリノベーション」が6月17日、渋谷区ふれあい植物センターで開催され、渋谷区民や本学学生・教職員など約30人が参加した＝写真。

本講演会は研究開発推進センターの主催で、「Shibuya Social Action Partner（SSIP）協定」に基づき、渋谷区民の生涯学習の機会を提供する「渋谷ハチコウ大学」と連携して実施された。講師には、植物センター園長であ

り、NPO法人アーバンファーマーズクラブ代表理事の小倉崇氏を迎え、都市農業（アーバンファーマーミング）の現状と可能性、人と人をつなぐコミュニティの意義についての講演を行った。

冒頭、小倉氏は、平成23（2011）年の東日本大震災を契機に都市農業に関心を持ち始めたきっかけに触れ、「震災直後、都市部でも食料が不足し、物流の途絶による『食』の危機を痛感した」と話し、加えて、日本の農業就業人口が過去30年で約350万人減少している現状に触れ、「自分たちが食べたい野菜は自分たちで育てる」という思いからNPO法人を立ち上げたことを説明、同法人による多彩な活動や海外の事例も紹介され、都市農業は単なる食料生産にとどまらず、教育・福祉・環境・地域活性化など多様な価値を持つと強調した。その後、会場である植物センター内の見学ツアーも行われ、環境調整により育成される多種多様な植物に参加者たちは関心を寄せていた。最後に小倉氏は、参加者からの質問一つ一つに丁寧に答え、講演会は終始和やかな雰囲気の中で閉会した。

第1回法学会講演会

「法廷メモ訴訟がいま 教えてくれること」を開催

国学院大学法学会主催による令和7年度第1回法学会講演会「法廷メモ訴訟がいま教えてくれること」が、6月10日に渋谷キャンパスで開催された＝写真。

講師には、米ワシントン州弁護士であり、元明治大学特任教授のローレンス・レパタ氏を迎え、日本の裁判制度の特徴に加え、レパタ氏の出身国であるアメリカとの比較を通じて、法廷メモ訴訟に至るまでの経緯が解説された。



レパタ氏は昭和58（1983）年、研究目的で東京地方裁判所の刑事法廷を傍聴中にメモを禁じられたことや、提出した取材許可願が理由の説明もなく却下されたことを受け、「法廷でのメモ禁止は国民の知る権利や裁判の公開原則に反する」として国を提訴。全国的な注目を集めたこの訴訟は、平成元（1989）年、最高裁判所において「法廷でのメモは原則自由である」との判断が示された。

参加した学生からは「本訴訟により、法廷でメモを取ることが権利としては認められなかったが尊重はされることになった。その結果に満足しているか」との質問が寄せられた。これに対しレパタ氏は「この判決は進歩ではあるが、裁判の公開原則の趣旨からすれば、さらなる透明性が求められる」と述べ、より開かれた司法制度への期待を示した。

参加者は、講師の言葉に真剣に耳を傾け、随所でメモを取りながら学びを深めていた。

柳田國男と国学院大学



令和7（2025）年は、日本の民俗学を創始した柳田國男（1875年7月31日生）の生誕150年という節目にあたる。この機会に、あらためて柳田と本学の学統形成の関係を振り返ってみたい。

昭和15（1940）年4月、本学大学部国文学科に国文と国史両学科の必修科目として「民俗学」が開設された。近代以降、西欧諸学を導入していた東京帝国大学など日本の大学には開講されていなかった科目で、その設置は画期的なことであった。

この立役者が折口信夫であったことは言うまでもない。折口はそれ以前から、柳田の提唱する「民間伝承学」が国文学研究に有効であると考え、新たな道として柳田の学問を学び、自分の師と仰ぐだけでなく、

た。

昭和28年9月3日、もともと柳田の学問を理解していた折口が、民俗学の行く末を案じつつこの世を去ったが、柳田の教授退任は昭和35年5月で、84歳まで続いた。この間、昭和30年7月開設の本学日本文化研究所については、昭和28年の設立準備から参画している。研究指導委員（研究審議委員）として、設立趣意書、規程制定に加わっており、設立準備会による研究所基本方針には、固有信仰の精深な研究などがうたわれている。この研究所に大きな期待を寄せていた柳田は、幾度も講演を行い、昭和33年11月の「みてくら」には400人もが集まった。柳田の最後の本学訪問は、逝去（8月8日）の前月、昭和37年7月6日に開催された日本文化研究所研究審議委員全體會であった。

柳田國男はその最期の時

昭和25年10月24日東京駅柳田（左）と折口の旅の出発（研究開発推進機構提供）



加えて柳田は、文化勲章を受章する昭和26年の4月に、本学教授に就任している。折口が主任教授となつて、大学院に神道学専攻を設置するにあたってのことと、柳田は「神道理論」と「神道教理史」を担当した。前年の就任受諾時には、石川岩吉学長に給与受給を断り、「自分にこんなに出す位なら何故若い者を仕立てる方に使われないのか」と一喝したエピソードが伝わっている。柳田はいくつもの大学で教鞭をとったが、教授への就任は本学のみであつた。

昭和28年9月3日、もともと柳田の学問を理解していた折口が、民俗学の行く末を案じつつこの世を去ったが、柳田の教授退任は昭和35年5月で、84歳まで続いた。この間、昭和30年7月開設の本学日本文化研究所については、昭和28年の設立準備から参画している。研究指導委員（研究審議委員）として、設立趣意書、規程制定に加わっており、設立準備会による研究所基本方針には、固有信仰の精深な研究などがうたわれている。この研究所に大きな期待を寄せていた柳田は、幾度も講演を行い、昭和33年11月の「みてくら」には400人もが集まった。柳田の最後の本学訪問は、逝去（8月8日）の前月、昭和37年7月6日に開催された日本文化研究所研究審議委員全體會であった。

文学部教授 服部比呂美



—前編—

子どもたち自身に変化を求め のではなく、環境の因子を 変化させる保育とは

人間開発学部・野澤純子教授

のざわ・じゅんこ

博士（ヒューマン・ケア科学）。専門は、特別なニーズのある子どもの心理支援、インクルーシブ教育。筑波大学大学院博士課程修了。公認心理師、臨床発達心理士。主な著書に「よくわかる！保育士エクササイズ」（ミネルヴァ書房）の『障害児保育演習ブック』（2021年）と『子ども家庭支援論演習ブック』（2023年）など。

全編はこちらから



後編



前編

研究者に聞く

専門性を生かした実践研究のアプローチ

保育における実践研究をおこなうにあたっては、さまざまな専門性からのアプローチが考えられますが、私は臨床発達心理士や、国家資格である公認心理師としての知見をもとに、保育の現場に参加しながら研究を進めています。保育士資格もっていますが、基本的には心理学という専門性のもとに現場に携わっているんです。

大学院生として当初籍を置いていた障害児教育を専門とする修士課程は、現場のエキスパートを養成することに傾注していき、当時から地方自治体の嘱託の心理相談員として、障害児福祉施設の発達相談や保育園・幼稚園の巡回相談のような仕事に取り組んでいました。その後、博士課程に進むにあたってはより研究に重きをおきつつ、特に保育の場で就学前のお子さんたちと毎日向き合っている保育者たちと共に、実践的な研究を重ねるようになりました。現在に至るまで、主に現場に立つ保育者の方を通じて子どもの変化を見つめる、というようなアプローチをとってきています。いずれにしても、私がおこなっているのは実践研究であって、現場なきところに研究はないといつもいいます。

具体的には専門にしているのは、特別な支援が必要なお子さん——特別なニーズ児という表現をしています。が、こうした子どもたちの支援にかなう研究です。

たとえば保育園や幼稚園で巡回相談をする新米神職として神宮のさまざまな祭儀に奉仕する生活というのは、決して楽なものではありませんでした。たとえば、「三節祭」とも呼ばれる、6月、12月の「月次祭」や、10月の「神嘗祭」は、神宮にとって非常に重要な祭儀です。特に深夜に執り行われる宵晩の御饗祭は、浄間の中、参拝者が一切いないところで、大神様と奉仕する神職だけの、極めて特殊な空間での祭儀です。

奉職して2カ月ほど、私は神職として最初に就く職階である「出仕」として初めて月次祭に奉仕しておりました。薦という敷物の位置ひとつをとっても、非常に細かく定められており、その他にも覚えなければならぬことばかりで本当に大変でした。しかも、神宮の祭儀は外で行われますから、雨が降ってきたときには雨天時のために定められた対応が求められ、雨がやんだらやんで、即座に復旧しなければならず、天候が目まぐるしく変わる状況の中で十分な奉仕ができませんでした。

後年、伊勢の風に慣れた頃、親しませていただいていた先輩に、冗談まじりで、あの時の状況は奉職2カ月目の新米に判断させるには、あまりにも荷が重かったのではありませんか、といったことを尋ねたことがあります。先輩は笑いながら、そうかもしれないが、あれで神職としての覚悟が決まっただろう、といったことをおっしゃっていました。

雨が降ろうが風が吹こうが、ときに人がひとりと欠けようが、いつ何時、どんな不測の事態があらうとも、目の前の状況に臨機応変に対応しながら、祭儀の次第を滞りなく進めることこそが肝要である。大神様の前で決して滞りや礼を失することがあってはならない、そのために万全の準備をしなければならないし学び続けなければならないということなのです。

そして先輩方は、悠久の歴史の中で連綿と紡がれてきたこうした祭儀に奉仕することに、人生を賭している方々ばかりでした。



障がいの社会モデルとエンパワーメントの視点

なぜ私がそうした手法をとっているかといいますと、障がいの社会モデルや、エンパワーメントといった観点を重要視しているからです。障がいによる生活上の困難は個人の努力で乗り越えるものではなく、それを社会との関係でとらえ、個人ではなく社会（取り巻く環境）が変わっていく必要がある、という考え方が1970年代ごろから議論されてきました。障がいの社会モデルとは、そうした考え方のひとつで、生活上の困難を障がいのある個人に責任を帰すのではなく、障がいのある人を取り巻く社会・私は環境の因子と呼んでいます。そこに原因を求め、変化させていくこうとするものです。

保育の現場に引きつけば、保育者からのお子さんの指示がすぐ理解できないお子さんがいたとき、その子が理解できないような指示やかかわり方の工夫など、子どもを取り巻く状況・環境の因子のほうを変えていくことが、子どもたちへのエンパワーメントとしての支援につながっていく、ということですね。

だからこそ、まずは保育者たちの願い・ニーズの把握からはじめていくのです。普段の指導内容や、子どもたちへの対応の仕方、そこでどんな困り感を抱いているか、といった現場の声を聞いていきます。

場合によっては保育者個人ではなく、保育園や幼稚園の全体的な体制が変えるべき環境の因子として浮かび上がってくることもありますから、園長といった方々に、クラス運営の方針などの話を聞いていくこともあります。そもそも保育者に限らず、小学校の先生も含めて、ヒューマンサービスに関する仕事は、感情労働といわれるように、非常に心理的な負担やストレスも大きく、疲弊

しやすい職業でもあります。私のような研究者にコンサルテーションを依頼くださるのは、子どもたちはもちろん、そうした保育者の方々のバックアップしてほしい、というように管理職の方からお声がけということもあるのです。

障がいのある子どもやその可能性のある子どもなどの特別なニーズ児たちを支援するということは、障がいの社会モデルをもとに、子どもを取り巻く環境の因子のひとつである保育を支援・変化させていくということからはじまる。だからこそ現場のニーズの把握をしますし、子どもたちが活動しているところの動画をとったり、先生たちに日常の記録をとってもらったりと、さまざまなデータを保育者とともに探っていきます。先生によって、細かくメモしたかったりチェックシートのようなかたちになることがあったりと記録しやすい形態も異なりますから、さまざまなかたちを用意しておくんです。

さて、インタビュの後編では、より具体的なエピソードについて触れてみたいと思います。保育園の給食で「いただきます」をみんなで行う前に食べだしてしまったり、何度もおかわりしてしまったり途中で止めるおとされたりと、という5歳のお子さんと向き合ったことがありました。どのように環境の因子を変化させていったのか、ニーズ調査の内容と共に、お話ししていきます。



「人間の学が知の乾きを潤す」
国学院大学が蓄積し醸成してきた知恵を
多彩なスタイルでご紹介します。

国学院大学メディア

—後編—

祭儀の重みと 奉仕の中で育まれた 覚悟

神道文化学部・山口祐樹助教

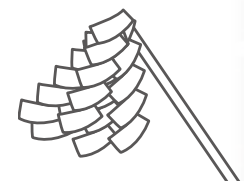
全編はこちらから



後編



前編



やまぐち・ゆうき

修士（神道学）。専門は祭祀学、神社祭祀。2005年本学大学院博士課程前期修了後、伊勢の神宮に奉職、その後宮内庁掌典職などでの奉仕を経て、現在は東京都内の神社にて禰宜として奉仕。本学神道文化学部兼任講師を経て、2022年より現職。



伊勢神宮での神明奉仕と研究活動

本学大学院を修了した私は、神職として伊勢の神宮に奉職し、同時に教學課研究員も拝命したことで、それまでに学んできたことも生かしつつ研究活動にも取り組みながら、幅を広げていくのではないかと考えていました。

偶然のタイミングではあったのですが、私が神宮にて御奉仕するようになった平成17（2005）年というのは、そこから9年かけて行われていく第62回式年遷宮のはじまりの年でありました。

20年に1度行われる、式年遷宮という歴史の蓄積そのもののような祭儀を、その最初から経験することができた。新たに神職に就くものとして、これ以上の幸運はないといっていいくらいの巡り合わせでした。

とはいえ、インタビュの前編でお伝えした通り、神職として奉仕する道を選ぶまでに、かなり右往左往しておりました。そんな私が伊勢の神宮で目の当たりにしたのが、文字通りの、生粋の神職、の方だったのです。

大神様の祭儀に奉仕するというところに人生を賭している神職の先輩たちが、右を見ても左を見ても、そこら中、本当にたくさんおられる。それが、神宮という環境でした。

そしてそこには、大学院で学んだ後に奉職された先輩神職も多くいらつしやり、それこそ私が籍を置いた教学課や、神宮に伝えられた古文書などを保管する神宮文庫で、御遷宮や日々の奉仕の糧とするためにしっかりとご自身の研究も続けておられました。

一命を賭すようにして奉仕しておられる生粋の神職の方々がいて、そのなかでも研究を続けているという方々がいた。つまりは、これから私自身が目指すべきモデルとでもいうような先輩たちが、目の前にいるという大変刺激的な状況に身を置くことになったということの意味しました。これもまた、本当にありました。

新米神職として神宮のさまざまな祭儀に奉仕する生活というのは、決して楽なものではありませんでした。たとえば、「三節祭」とも呼ばれる、6月、12月の「月次祭」や、10月の「神嘗祭」は、神宮にとって非常に重要な祭儀です。特に深夜に執り行われる宵晩の御饗祭は、浄間の中、参拝者が一切いないところで、大神様と奉仕する神職だけの、極めて特殊な空間での祭儀です。

奉職して2カ月ほど、私は神職として最初に就く職階である「出仕」として初めて月次祭に奉仕しておりました。薦という敷物の位置ひとつをとっても、非常に細かく定められており、その他にも覚えなければならぬことばかりで本当に大変でした。しかも、神宮の祭儀は外で行われますから、雨が降ってきたときには雨天時のために定められた対応が求められ、雨がやんだらやんで、即座に復旧しなければならず、天候が目まぐるしく変わる状況の中で十分な奉仕ができませんでした。

後年、伊勢の風に慣れた頃、親しませていただいていた先輩に、冗談まじりで、あの時の状況は奉職2カ月目の新米に判断させるには、あまりにも荷が重かったのではありませんか、といったことを尋ねたことがあります。先輩は笑いながら、そうかもしれないが、あれで神職としての覚悟が決まっただろう、といったことをおっしゃっていました。

雨が降ろうが風が吹こうが、ときに人がひとりと欠けようが、いつ何時、どんな不測の事態があらうとも、目の前の状況に臨機応変に対応しながら、祭儀の次第を滞りなく進めることこそが肝要である。大神様の前で決して滞りや礼を失することがあってはならない、そのために万全の準備をしなければならないし学び続けなければならないということなのです。

そして先輩方は、悠久の歴史の中で連綿と紡がれてきたこうした祭儀に奉仕することに、人生を賭している方々ばかりでした。

神職の実践知と教育者としての思い

私は伊勢神宮に計10年間——うち3年は宮内庁掌・典職に出向させていただきましたから、実質的には7年間、伊勢の神職として奉仕する日々をおくらせていただきました。

そのときに周囲にいた方々は、祭儀を前に自らの心身を徹底的に研ぎ澄ませ、先人らの足跡を貪欲に学び、一切の妥協なく大神様に奉仕している。生粋の神職、の皆さんだったのです。

もちろん、こうしたありようだけが神職のすべてとは申しません。それぞれの地域のなかに有機的に根をおろし、周囲の人々と密に関わりながら神様とお参りにこられた方々のご縁をつないでいく、そのような神職の存在も、とても重要なものです。私自身、現在は妻の実家である都内の神社にて奉仕しておりますし、さまざまな神社や神職のありようのことも、もちろん踏まえようとしてお話ししている次第です。

だからこそ、心も体も無駄なものを徹底的にそぎ落としながら、圧倒されるような歴史を背負いつつ目の前の祭儀に一心に奉仕している、あの神宮の神職たちの姿は、常に頭の片隅に置いておく必要があるのではないかなとも思うのです。私自身、大学で教壇に立つようになったのも、そうした経験をした人間だからこそ

学生たちに伝えられることがあるのではないかと、それこそがあなたの役目ではないかと、恩師の岡田社司先生（現・本学名誉教授）をはじめお世話になった方々からのお声を頂戴したからでした。

いま、実際の奉仕経験のもとに学生の皆さんと相対しているなかで、心と体のみならず、やはり知識もきちんと伝えなければならぬと強く感じています。祭儀のなかで頭をさげる作法ひとつとっても、それは歴史のなかで積み上げられてきた、きちんとした背景のある所作であるわけですね。

現在私は、古代の神宮において、朝廷から派遣された大神宮司や、伊勢の神職層である禰宜、大内人といった人々が、どのように祭儀に奉仕していたのかということについて研究論文を書き継いでいっています。それらまた、長い歴史の中で数多の神職らがどのよう感じ、考え、奉仕してきたのかということこそ、神職を志す学生たちにも伝えていければと思うからでもあります。

歴史を知って、迷わない。神明奉仕の経験を重ねてきた教員として、そして歴史を巡りながら伝えていく立場の人間として、これからも神職を志す学生たちの背中を押していければと考えています。

渋谷区図書館連携事業 「新図書館ワークショップ」を開催



6月28日、渋谷キャンパス図書館において、渋谷区図書館連携事業「新図書館ワークショップ」が開催された。

渋谷区図書館連携事業は、令和4（2022）年3月に閉館した渋谷区立渋谷図書館が、令和10年度に渋谷区立広尾中学校敷地内に新設されるのを受け、本学図書館と渋谷区図書館が連携し、新図書館を地域コミュニティの「知」の核とすることを目的に本年度から始動した。

第1弾として実施された今回は、ブックディレクターの幅允孝氏（有限会社BACH代表）と本学学生

による、本や図書館をテーマとしたインタビュークシヨップを開催。読書に関心を持つ学生が各回8人程度、計3回のワークショップに参加した。写真。

参加学生は、自己紹介の後、読書の頻度や好みのジャンルを語り合い、幅氏がセレクトした数十冊の本の中から「図書館にあれば手に入るかもしれない2冊」を選択。装丁や内容に引かれた理由を共有し、「装丁から内容が想像できず興味を引かれた」「旅をしたくなるような本だった」などの意見が出された。

最後に幅氏から「新図書館に期待すること」が問われると、「入手困難な本も置いてほしい」「癒やしの空間であってほしい」「障がいを持つ人にも配慮された図書館を」などの声が上がリ、幅氏は「それぞれの思いを受け止められる図書館を目指したい」と応じた。

なお、幅氏は本学「みちのきち」の監修も担当しており、学術メディアセンター1階や総合学修館（6号館）には、幅氏が選んだ書籍と読書のためのスペースが設けられている。

大学院進学相談会を開催



6月28日、渋谷キャンパスで、大学院進学希望者を対象とした進学相談会が開催され、本学学生を含む約110人が参加した。写真。

はじめに、佐藤長門・大学院委員長（文学部教授）が「本日は、現在大学院で指導する教員の話を通じて貴重な機会。進学に向け、各専攻での研究内容や入試制度について理解を深めてほしい」とあいさつ。

続いて、参加者は各研究科（専攻・コース）に分かれ、担当教員から研究概要や入試制度、支援体制などの説明を受けた。学生たちは熱心にメモを取りながら耳を傾け、進学に関する具体的な質問をする姿も見られた。

院友都立高等学校部会総会を開催



令和7年度の院友都立高等学校部会総会が6月28日に渋谷キャンパスで開催され、院友（卒業生）教員ら約40人が参加した。

同会は院友の都立高等学校・都内公立中学校教員らの集まりで、会員間および本学との交流、情報交換などを目的に開催している。開会に先立ち、加藤泰弘・同会会長（平3卒・99期文）と、高橋大助・教職センター長（文学部教授＝写真）があいさつ。続いて総会を執り行った。

その後、院友でNPO法人八王子つばめ塾理事長の小宮位之氏（平12卒・108期史）が「経済格差と教育格差～八王子つばめ塾（無料塾）の取り組み～」と題して講演。会場には、本学で教員を目指す学生たちの姿も見られた。

講演会終了後は、有栖川宮記念ホールで懇親会が開催された。参加者同士で活発な情報交換が行われ、会場は終始にぎわいを見せた。

久我山中学校の生徒が 国学院大学を職場訪問



6月10日、国学院大学久我山中学校の生徒たちが職場見学のために国学院大学渋谷キャンパスを訪問した。写真。中学からのキャリア教育に力を入れている同校では、約20年前より特別教育活動を行っており、その一環として生徒たちが企業や団体の職場を訪問し、そこで働く人たちから直接話を聞く機会を設けている。

当日は同校女子部に在籍する中学2年生25人が来校。まず生徒たちはキャリアサポート課および教務課の職員から日々の業務内容などについて説明を聞き、大学職員の仕事について理解を深めた。学生食堂「和」での昼食後、本学博物館に移動した生徒たちは学芸員から博物館の管理運営に関わる業務について説明を受けた。最後は学芸員の案内で博物館内を見学。展示品だけでなく、展示品の劣化を防ぐための設備や工夫などについても説明を受けた。

オンライン公開講座 「少年法への招待」



高内寿夫
(法学部教授)

オンライン公開講座「少年法への招待」が、3月3日から6月30日まで開催された。

本講座は、約30年前に故・澤登俊雄名誉教授が全国の大学に先駆けて国学院大学法学部で開講した「少年法」に関する講座をもとに構成されている。

今回の講座は前半と後半に分けて行われ、前半では「選挙権年齢および民法の成年年齢が18歳以上に引き下げられたことを受け、少年法の適用年齢も現在の20歳未満から18歳未満に引き下げるべきではないか」、後半では「少年法は非行少年の健全育成を目的としているが、犯罪を行った者に対しては、少年であってもしっかりと刑事責任をとらせるべきではないか」という二つのテーマを取り上げ、高内寿夫・法学部教授が少年法の意義について講義を行った。写真。

最後に高内教授は「今回の講義が、非行に関わった少年たちの処遇のあり方や、今後の法改正について、少しでも関心を持ててもらえるきっかけになればうれしい」と受講生に向けてメッセージを述べ、講演を締めくくった。

国学院大学博物館収蔵の新資料 「仁徳天皇陵古墳副葬品」を堺市博物館で展示



「仁徳天皇陵古墳（大仙陵古墳）」の副葬品（金銅装刀子・甲冑片、包紙）

国学院大学では、内川隆志・文学部教授（国学院大学博物館副館長）を中心に、幕末・明治期の好古家に関する研究を進める中で、著名な好古家である柏木貨一郎・益田孝旧蔵の資料を入手し、本学博物館で収蔵している。

なかでも、「仁徳帝陵」出土とされる資料については、堺市および日鉄テクノロジー株式会社との共同調査を実施。その結果、「仁徳天皇陵古墳（大仙陵古墳）」の副葬品（金銅装刀子・甲冑片、包紙）とみなして差し支えないことが確認された。

これを受け、7月19日から堺市博物館で開催される企画展「堺のたからもんー金で魅せる・黒を愛でるー」において、当該資料が初公開される。今後、国学院大学博物館でも公開が予定されている。



国学院大学たまプラーザ事務課が主催する就職活動イベント「学内合同企業説明会Ⅱ写真」と「ビジネスマナー講座（応用編）」が6月6・11日に開催された。

本説明会は、進路変更や就職活動を継続する4年生と、これから活動が本格化する3年生を対象に実施。4年生は採用直結型、3年生はインターンシップ対策として出席し、各企業の採用担当者から企業紹介や選考の流れを直接聴くことができる貴重な機会となった。

本講座は、企業の人事担当者を講師に招き、社会人に必要なビジネスマナーを実践的に学ぶことを目的に開催され、18人の学生が参加した。まず5月21日に行われた基礎編の振り返り、続いて企業訪問時のマナーや採用選考時のポイントについて、資料を用いて学習。さらに、実際の場面を想定したワークにも取り組んだ。参加者からは「以前のインターンシップではマナーが十分に身につけておらず、悔しい思いをした。今回の講座で得た学びを、今後の就職活動にしっかりと生かしていきたい」との声が聞かれた。

たまプラーザ 就活イベントを開催

国学院大学たまプラーザ事務課が主催する就職活動イベント「学内合同企業説明会Ⅱ写真」と「ビジネスマナー講座（応用編）」が6月6・11日に開催された。

本説明会は、進路変更や就職活動を継続する4年生と、これから活動が本格化する3年生を対象に実施。4年生は採用直結型、3年生はインターンシップ対策として出席し、各企業の採用担当者から企業紹介や選考の流れを直接聴くことができる貴重な機会となった。

本講座は、企業の人事担当者を講師に招き、社会人に必要なビジネスマナーを実践的に学ぶことを目的に開催され、18人の学生が参加した。まず5月21日に行われた基礎編の振り返り、続いて企業訪問時のマナーや採用選考時のポイントについて、資料を用いて学習。さらに、実際の場面を想定したワークにも取り組んだ。参加者からは「以前のインターンシップではマナーが十分に身につけておらず、悔しい思いをした。今回の講座で得た学びを、今後の就職活動にしっかりと生かしていきたい」との声が聞かれた。

インフォダイジェスト

…在学生 …保証人 …卒業生 …一般 …受験生
内容 日 時間 場所 対象 定員 料金 申込み 問い合わせ

大学からのお知らせ

入試関連オンラインイベントについて

国学院大学のことをもっと知りたいという受験生のために、スマートフォンやPCで参加できるライブ配信のオンラインイベントを開催します。学生による「キャンパスツアー企画」や「一般入試体験談トークショー」など日程ごとにテーマが異なりますので、ぜひ何度もご参加ください。

8～12月実施予定

大学HP（二次元コード）からお申し込みください。

入学課(☎03・5466・0141、✉exam@kokugakuin.ac.jp)

後期授業開始について

学部・専攻科・別科・大学院の後期授業開始は9月20日(土)です。学年暦については大学HPなどで確認してください。

大学院 令和8年度秋季入試日程

研究科	区 分	専 攻	募集人員	願書受付期間	試験日・合格発表	手続期間
文 学	前 期	一 般	神道学・宗教学	8月25日(月)～9月5日(金)	【試験日】 10月4日(土) (口述試験) 【合格発表】 10月14日(火)	【一次手続】 10月17日(金)～24日(金) 【二次手続】 令和8年2月25日(火)～3月4日(火)
			文 学			
			史 学			
		外国人	神道学・宗教学			
			文 学			
			史 学			
	後 期	学内成績選考	神道学・宗教学		【試験日】 10月8日(火) (口述試験) 【合格発表】 10月14日(火)	【一次手続】 10月17日(金)～24日(金) 【二次手続】 令和8年2月25日(火)～3月4日(火)
			文 学			
			史 学			
		社会人	神道学・宗教学			
			文 学			
			史 学			
法 学	前 期	一 般	神道学・宗教学	8月25日(月)～9月5日(金)	【試験日】 10月8日(火) (口述試験) 【合格発表】 10月14日(火)	【一次手続】 10月17日(金)～24日(金) 【二次手続】 令和8年2月25日(火)～3月4日(火)
		外国人	文 学			
		学内論文選考	史 学			
		学内成績選考	神道学・宗教学			
経 済 学	前 期	一 般	文 学		【試験日】 9月19日(金) 【合格発表】 9月26日(金)	【一次手続】 10月3日(金)～10日(金) 【二次手続】 令和8年2月28日(土)～3月5日(火)
		外国人	史 学			
		社会人	神道学・宗教学			
		学内推薦	文 学			

OPEN CAMPUS 2025について

渋谷キャンパスとたまプラーザキャンパスの両キャンパスで同時開催します。学部・学科での学び、模擬授業、キャンパスツアーなどのプログラムを用意していますので、ぜひご参加ください。タイムスケジュールおよび模擬授業の内容は、大学HP（二次元コード）をご確認ください。

8月2日(土)、3日(日)、23日(土)

大学HP（二次元コード）からお申し込みください。

・8月2日、3日分は、申し込み受け付け中～7月29日(火)23:59※

・8月23日分は、8月4日(月)10:00～8月19日(火)23:59※

※事前予約制プログラムの申込期限です。空きがある場合に限り、お申し込みいただけます。来場のみをご希望の方は、当日までお申し込みいただけます。

入学課(☎03・5466・0141、✉exam@kokugakuin.ac.jp)

令和7年度 ホームカミングデー

院友（本学卒業生）とご家族、ご友人、在学生、一般の方に、国学院大学へ集い親睦を深めていただくホームカミングデーを今年も開催します。一部企画を除き、どなたでも参加可能です。また、ホームカミングデーへの参加団体企画の募集も行っています。参加団体企画申し込みや当日の詳細などは、本学HPで順次お知らせいたします。

11月30日(日)

渋谷キャンパス

卒業生とご家族、在学生、一般の方

料無料

校友課(☎03・5466・0131、✉soumu-kouyu@kokugakuin.ac.jp)

夏季休暇中の事務休止日および事務取扱時間について

下記の期間、大学事務を一斉休止します。夏季休暇中の事務取扱時間は大学HP（二次元コード）で確認してください。

8月2日(土)～9月15日(月・祝)の(土)・(日)・(祝)、8月8日(金)～20日(水)

令和8年度 大学院秋季入学試験

国学院大学大学院では、別表の日程で令和8年度の秋季入学試験を実施します。詳細は、大学院HP（二次元コード）でご確認ください。

大学院事務課(☎03・5466・0142)

キャリアサポート

※詳細確認・申し込みはK-SMAPYⅡから行ってください

公務員対策入門講座

国家公務員、都道府県庁、特別区、政令市の公務員を目指したい大学1年生が対象です。基礎を一気に学べる入門講座で、3年次から始まる公務員採用試験に向けていち早くスキルアップを図ります。民間企業との併願を考える方にもおすすめです。詳しくは大学HP・K-SMAPYⅡでお知らせ。

11月開講予定 9月から申し込み受け付け開始

1年生

親子の「出会い」は「正対」から



名誉教授 新富 康央

しんとみ・やすひさ
学校法人国学院大学特別参事。
人間開発学部初代学部長、専門
は教育社会学、人間発達学。新
しい時代の子育て論には定評。

「一メートル高い壇上で話される先生と違って、私のように赤字を抱えて百姓をしている人間は、自信を持って子どもに接することはできません」
これは、総務省の依頼で、漫画『クッキングパパ』（講談社）の作者・うえやまとち氏と実施した「父親の子育て講座」の質疑応答場面での、中学3年生の父親からの厳しい問いかけでした。それには「育児なしは意気地なし」と講話した筆者への反発があったかもしれせん。
彼の問いかけは、ある意味、受講者の本音が出たものと言ってよいでしょう。私の回答は、以下のようなものでした。
『「正対」という言葉があります。この言葉通り、真正面から真摯にお子さんに向き合ってください。どうか、本音で語り合ってください。自分の思いを素直に打ち明け、さらけ出して下さい』
後日、担当部署を通して、彼からのお礼の葉書が届きました。
お子さんが2階から下



りて来た時、家計簿を見せたそうです。汗をかい、一生懸命野良仕事をしても、なぜ数百万円の赤字になるのか。子どもに切実に語ったそうです。
「そうだったのか。俺、農業高校に行くよ。そして、黒字になる農業の仕事を勉強するよ」
それまで高校なんか行かない、と言っていた子どもが、熱く語ってくれたとのこと。また、農業の在り方を巡って、親子の対話は復活したとも。実は、思春期・青年の心理の特徴の一つは「背伸び志向」なのです。
青年期は、「マージナルマン」（境界人、周辺人）と呼ばれる時期です。青年は、自活という点で、「まだ」大人ではないが、身体的には「もう」子どもでもありません。すなわち、大人の側から見ても、子どもの側から見ても、「まだ」と「もう」の周辺（マージナル）に位置しているのです。
青年は、大人と子どもの異質な文化や集団の影響を同時に受けながら、そのいずれにも所属しきることができないという

近くて遠い？ 遠くて近い？ そんな親の気持ちや子どもの気持ちを一緒に考えませんか？ 新富名誉教授による子育てエッセーを隔月でお届けしています。感想や新富名誉教授への質問、講演依頼などございましたら広報課までお寄せください。

柔道部

東京都ジュニア体重別選手権大会で6選手が入賞
8人が全日本大会へ出場決定

令和7年度東京都ジュニア柔道体重別選手権大会が、7月6日に東京武道館で開催され、本学柔道部から6人の選手が3位以内に入賞し、9月に開催予定の全日本ジュニア柔道体重別選手権大会への出場権を獲得した。

本大会は、男子60kg級から100kg超級までの全7階級でトーナメント方式により行われ、各階級の上位4人が全日本大会へと進出する。

男子90kg級では、岡村颯馬選手（法2）、男子100kg超級では高橋翔選手（観まち2）がそれぞれ優勝を果たした。岡村選手は初戦から積極的な攻めを見せ、決勝では小外刈りによる一本勝ちで栄冠をつかんだ。高橋選手は、準決勝で小内刈りによる一

本勝ち、決勝では大外返しで有効を奪い、堂々の優勝を飾った。

そのほかの入賞者は以下の通り。
男子60kg級 吉村悠之介選手（健体1） 準優勝
男子60kg級 中野来飛選手（神文2） 第3位
男子66kg級 大柿将馬選手（法1） 準優勝
男子100kg級 真崎煌選手（観まち2） 第3位
なお、本大会に先立ち、全日本柔道連盟の推薦により男子66kg級で長屋進選手（法1）、男子73kg級で荒川琉正選手（健体1）の2名がすでに全日本大会への出場を決めている。これにより、本学からは8人の選手が全国の舞台に挑むこととなった。



入賞した選手たち＝写真左から大柿選手、中野選手、吉村選手、高橋選手、岡村選手、真崎選手（同部提供）

硬式野球部

緒方選手が大学日本代表として
日米大学野球に出場

国学院大学硬式野球部の緒方連選手（健体2）が、7月8日から13日に開催された「第45回日米大学野球選手権大会」に、大学日本代表（侍ジャパン）の一員として出場した。

緒方選手は、今春の東都大学野球1部リーグ戦で開幕戦からスタメンに名を連ね、12試合に出場。攻守にわたりチームに大きく貢献し、遊撃手としてベストナインに選出された。

今回の日本代表チームは3・4年生が中心に選出されたなか、唯一の2年生となった。また、同部の鳥山泰孝監督も昨年に続き、大学日本代表のコーチとしてチームに同行した。

本大会は、日本とアメリカの大学代表が全5試合を戦い、勝敗を競うもので、日本代表は5戦全勝で大会3連覇、通算21回目の優勝を果たした。

緒方選手は、12日に行われた第4戦に9番・遊撃手で先発出場。4-2で迎えた四回表には、先頭打者として左前打を放ち、続く五回表には無死二・三塁の好機で打席に立ち、遊ゴロの間に1点を加えた。試合は日本代表が1点差で逃げ切り、6-5で勝利。緒方選手は3打数1安打、1打点、1四死球の成績を残し、勝利に貢献した。

今後のリーグ戦や国際大会における緒方選手のさらなる活躍に、期待が高まる。



東都大学野球・青山学院大学戦で打席に立つ緒方選手

陸上競技部・柔道部

FISU ワールドユニバーシティゲームズ2025に
選手・監督・コーチが選出

7月16日から27日にかけて開催される「FISUワールドユニバーシティゲームズ2025」（ドイツ・ライン・ルール）に、TEAM JAPANの一員として国学院大学陸上競技部と柔道部から選手・スタッフが選出された。

陸上競技部からは、上原琉翔選手（健体4）がハーフマラソンおよびハーフマラソン団体種目に出場。同部の前田康弘監督は陸上競技チームのコーチとして同行する。また、柔道部からは川上智弘コーチ（平24卒・120期法）が日本代表の監督として参加することが決定した。

■上原選手のコメント



陸上競技部の上原選手

陸上競技部の上原選手

日本代表、そして国学院大学の代表としての誇りをもって、世界の舞台で大学の名を示す走りをしてきます。応援のほど、よろしくお願いいたします。

このたび、初めて世界の舞台に挑戦できることを大変うれしく思っています。目標はメダル獲得です。初の国際大会ということで緊張や不安もありますが、これまで積み重ねてきた練習の成果を信じ、最後まで諦めず、正々堂々と勝負したいと思います。

また、この経験を通じて自分自身の成長はもちろん、チーム全体にも良い刺激を持ち帰れるよう、しっかりと準備を整えて大会に臨みます。

■前田監督のコメント

平素より陸上競技部の活動に対し、ご支援を頂き部員一同感謝申し上げます。

この度FISUワールドユニバーシティゲームズ2025の陸上競技日本代表コーチとして、上原とともにメダルを目指して励んで参ります。私自身も世界を肌で感じることで、今後の指導者としてのビジョンを広げ、本学陸上競技部の発展につなげていきたいと思っています。ご声援のほどよろしくお願いいたします。

■川上コーチのコメント

平素より柔道部の活動に対し、ご支援を頂き監督、コーチ含め部員一同感謝申し上げます。

日本代表の監督として、選手たちが力を発揮できるよう精いっぱいサポートいたします。また、本大会の経験を糧にコーチとしてより成長し、本学柔道部の強化にもつなげていきたいと思っています。ご声援のほどよろしくお願いいたします。

